

(表紙から→)

◆終戦直後のイタリアの街道を巡る旅芸人の寒々とした日常を淡々と描きながら、「人間の併せ (表紙から→) 持つ聖性と獣性の対立と和解」「生がもつ本質的な孤独とその救済」など、人間の内面に踏み込んで見せたフェリーニの主張がじわじわと浸透してきて、改めて感動しました。

◆『道』のシナリオはフェリーニ、脚本家のトゥリオ・ピネリ、作家のエンニノ・フライアーノが4カ月を費やして練り上げただけあって、印象的なセリフとシーンが無数にある。そのごく一部をいくつか紹介します。

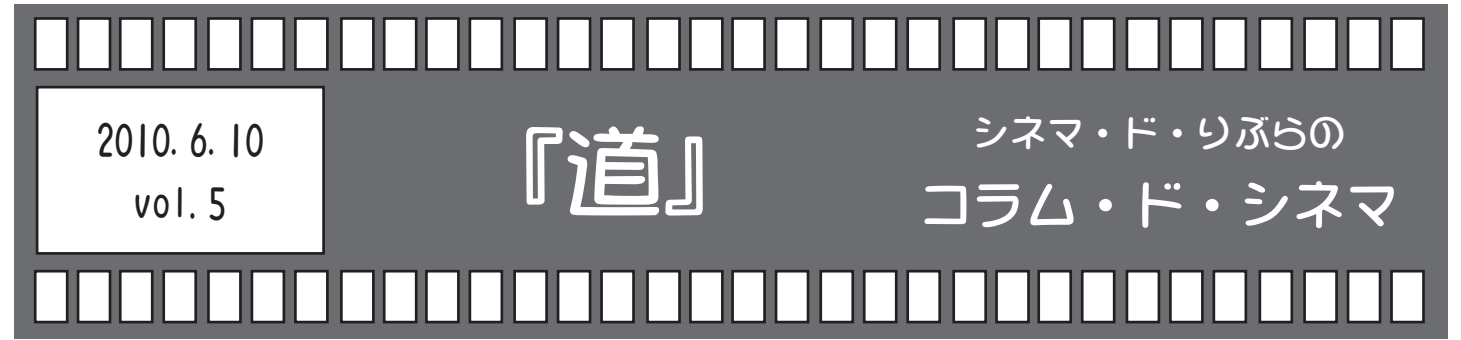
- ・ひと稼ぎをして食堂で夕食をとるシーン：食堂で外食するのは初体験らしいジェルソミーナのワクワクとした態度⇒ザンパノがつまようじを使うのをまねる演技に注目
- ・ジェルソミーナが初めてイル・マットのヴァイオリンの聴くシーン：たばこを吸いながらヴァイオリンを弾くイル・マットの吸いかけたたばこの絶妙の置場所。⇒ヴァイオリンの糸巻き部を注目。
- ・ザンパノとジェルソミーナの面白い会話のシーン：「故郷は何処なの？」⇒「生まれたところさ」⇒「言葉が違うね。生まれたのは？」⇒「親父の家さ」
- ・ザンパノが釈放され再び旅が始まり久しぶりに海辺に出たシーン：海だ！ジェルソミーナの喜びよう！ザンパノも足を波につけてくつろぐ。
- ・修道院の納屋での夜の会話：「何故私と一緒になの？」⇒「・・・」⇒「今は二人は夫婦みたいね」⇒「おかしなことを言う女だ」⇒「何を考えてるの？」⇒「何も考えてない」⇒「あんたは何も考えないの？」⇒「何を考えたらいいいんだ？」⇒「少しは私が好き？」⇒「……」
- ・ザンパノが警察に留置された夜のジェルソミーナとイル・マットの会話：「彼はどうしてお前を連れ戻したんだらう？そうだ、あいつはお前に惚れてるんだ。しかし彼は犬だ。お前に話しかけたいんだが、話しかける言葉を知らない。かわいそうな奴なんだ」「この世に無益なものなどはない。路傍の石も夜空に輝く星も同じだ」
- ・ザンパノに会えば、からかって怒らせてばかりいるイル・マットだが、彼はザンパノに対しても心の底で親愛の情を抱いていたんだと思います。彼は、奪おうとすれば奪えたかもしれないジェルソミーナをザンパノのために残して、明けきらぬ朝の街角から去っていきます。この別れのシーンも素晴らしい！

- ⇒「チャオ。サリュウ」とイルマット。⇒「行くの？」とジェルソミーナ。⇒「これをやる。ジェルソミーナ」とかけていたネックレスをジェルソミーナに⇒少し顔をしかめて「思い出の品だ」⇒そして何度も振り返りながら遠ざかっていく⇒ジェルソミーナは涙ぐんだ目で無言で見送る⇒「チャオ、ジェルソミーナ」⇒「チャオ」⇒「チャオ」⇒イル・マットがジェルソミーナの視界から消える時の最後の言葉は「アッディオ！ジェルソミーナ！」
- ・イル・マットがジェルソミーナの視界から消える時の最後の言葉は「アッディオ！ジェルソミーナ！」：「チャオ」も「サリュウ(フランス語)」も「アッディオ」も別れの言葉ですが、「アッディオ」はスペイン語の「アディオス」やフランス語の「アデュー」同様、「神の身許へ」を語源とし、「決定的な別れ」にしか使われない結構重い言葉だそうです。きっとイル・マットは万感の思いでジェルソミーナに別れを告げたのでしょう。ひょっとすると間もなく「神の身許」に帰ることを予感していたのかもしれない。
- ・リチャード・ベースハートは表情も含めて極めてデリケートに見事にこのシーンを演技していました。イル・マットはへらへらして見せているが、きっと名の通り愛情深い、神に仕える道化だったのかも。そういえば綱渡りの時、彼は背中に天使の羽根を付けていましたね。
- ・そして有名なザンパノ慟哭のラストシーン：ジェルソミーナの死を知った夜、酒場でしたたかに酔って袋叩きにあい海岸に来るザンパノ：「友達なんかいらん。誰もいなくても平気だ。一人でいたいんだ」⇒波打ち際で顔を洗うザンパノ⇒空を見あげたら満点の星⇒急に嗚咽を始め、静かに泣き崩れる⇒波と虫と嗚咽の声⇒そしてバックから「ジェルソミーナの歌」が……

以下は「週刊 20 世紀シネマ館 (講談社刊)(1957 年の名画 1)」からの引用です。

「……ジェルソミーナを「失った」ことに気づき、その深い孤独を味わうことで、長い遍歴の後に「救済」されるザンパノの魂。夜の浜辺でからだをふるわせ、慟哭するザンパノを、広く暗い海と空がそっと包み込む。その情景は、みるものところにすがすがしささえこのす、永遠の名場面となった」

(K.M)



「道」の言葉を考える

この映画はヴェニス国際映画祭銀獅子賞・米アカデミー最優秀外国語賞受賞の名作であるが、57年前の1954年制作作品であり、私も当時観賞したが、内容的にはしっかりした記憶がありませんでした。しかし、題名の「道」と哀切漂うテーマソングである「ジェルソミーナ」の印象は、現在でもインパクトが大であり、「道」についてもいろいろ考えさせられました。

人魚が描かれた幌のオート三輪で、自分の本意でない旅に同行させられるジェルソミーナをみると、「何のために生きているのだろうか」と思い、人は過去の「来た道」に戻ることが出来ないと感じ、それでも人は、けっしてひとりぼっちで「道」を歩いているわけではないことを知り、最後のシーンで、ザンパノが「人生の道」の喪失感を実感して初めて後悔し、孤独な星空の下、砂浜で獣のように泣きつづけるシーンは感動的であった。

ザンパノは、本能のまま行動する粗暴な男。ジェルソミーナは天使の生まれ変わりのような女。曲馬団にいる「キ印」と呼ばれる陽気な男。この三者を取り巻き展開するストーリーの中で、ヴァイオリンの哀しいメロディーがいろいろな場面を想像し、「道」の題名とともに印象に残る作品であったと思いました。S.N

La Strada(道)

かつてローマの統治者は、人気とりのために私財を投じて「パンとサーカス」と呼ばれる、小麦の配給とコロセウムに象徴される見世物を民衆に提供した。また、アッピア街道のような道路網を、ローマ全土と周辺属国までもめぐるさせることによって、迅速な軍隊の移動を可能にするとともに、平時に於いては、人と物資の移動によってローマの1000年続く栄光の基礎を作った。「道」を観た時、なぜかローマの歴史にある「道路と見世物」との符合を感じたのは、私だけでしょうか。

「この道」はどこからきて、何処へつながるのだろうか？

シネマ・ド・りぶらの コラム・ド・シネマ

この映画の「道」は整備された道ではなく、村から村、町から町へ続く白い道であった。旅芸人にとって、「道」は町と町・村と村をつなぐ命綱であり、民衆にとっては、僅かな楽しみの訪れを待つ道であったらうと思われる。

明日への希望をつなぐこの道は、海の見える町で「ジェルソミーナ」のメロディーを残して死んでゆくジェルソミーナにとって、哀しい道となった。テーマ曲「ジェルソミーナ」は、監督フェリーニの殆どの作品に係ったニーノ・ロータが作曲した。フェリーニ以外の作品には「太陽がいっぱい」「ゴッドファーザー・愛のテーマ」などが有る。Au

不思議な体験

◆登場人物の名前

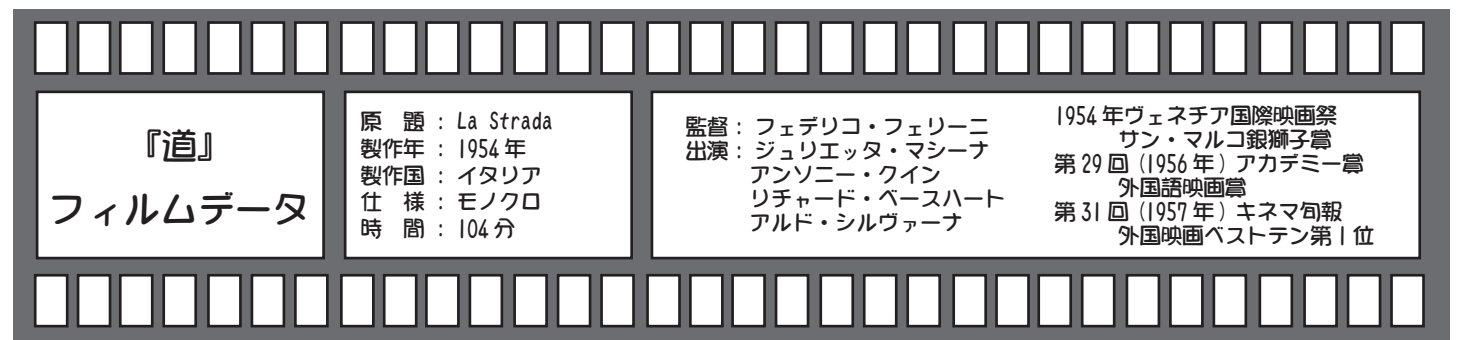
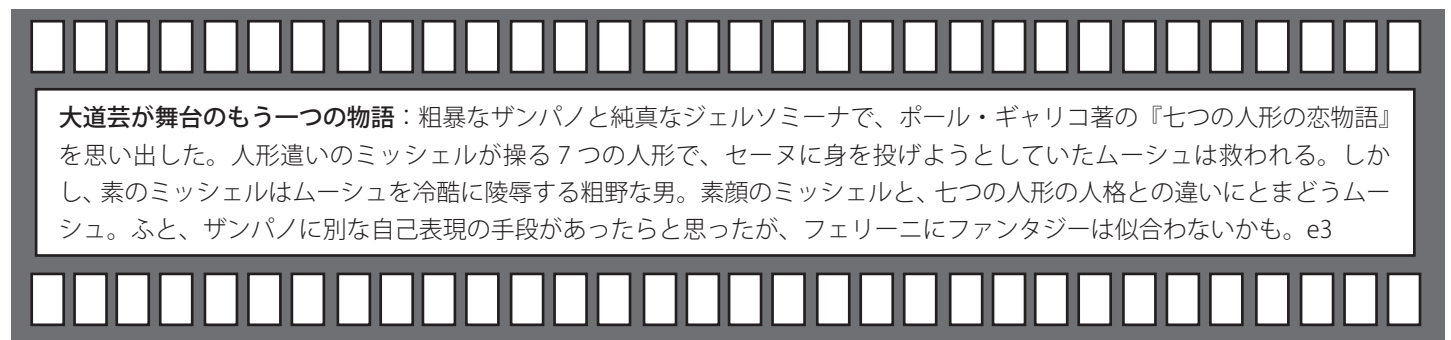
- ・ザンパノ：イタリア語で「悪」の意味～悪漢の象徴
- ・ジェルソミーナ：イタリア語でジャスミンの意味～純粋さの象徴。但しジャスミンの花ことばは複雑
- ・イル・マット：イタリア語で奇人の意味～「神の道化」のような意味もあるそう

◆ずっと昔『道』を観た時、例えようもない暗い映画だと思ひ、その印象がずっと残っていたのですが、今回あらためてじっくり見ている内に、この印象が徐々に薄らぎ、むしろザンパノ、ジェルソミーナ、イル・マットが三者三様にそれぞれの人生を一生懸命に燃焼したのだという、むしろホッとした温かみさえ含む印象に変わっていくという不思議な体験をしました

・ザンパノは救いようのない「ワル」？⇒とんでもない！随所にはほの見える、本人も気づいていないジェルソミーナに対する愛情！

・ジェルソミーナ：白痴？⇒とんでもない！時に見せる純粋で知的とさえ思える表情としぐさ！

・イル・マット：キ印？⇒とんでもない！軽薄な振舞の奥に見える、神を信じる賢く温かい心！
(裏表紙に続く→)



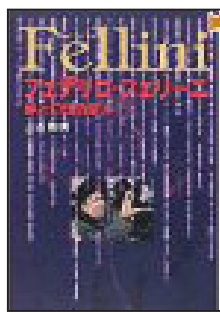
フェデリコ・フェリーニ



W 778 TOKYO FM 出版
『フェデリコ・フェリーニ
作品イメージ画集』



778.2 『フェリーニ』
ジョン・バクスター
平凡社



778 『フェリーニを読む』
岩本 憲児 フィルムアート社

N 778.2 川本 英明 / 著 鳥影社
『フェリーニ 夢と幻想の旅人』

778.2 ナウオンメディア
ダミアン・ペティグリュ
『フェリーニ 大いなる嘘つき』

778.2 『映画監督という仕事』
フェデリコ・フェリーニ
筑摩書房



778.2 キネマ旬報社
『映画遺産 200 オールタイムベスト』

N 778.2 『イタリア映画史入門』
ジャン・ピエロ・ブルネッタ / 著
鳥影社

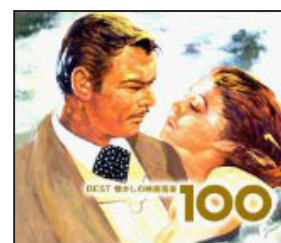
N 778.0 淀川 長治 / 著 清流出版
『ビデオで観たい名画 200 選』

N 778.2 渡辺 祥子 / 著 近代映画社
『世界の映画ベストセレクション』



アンソニー・クイン

N 778.2 『映画俳優』
佐藤忠男 / 著 晶文社



音楽

5A Toshiba Records
ベスト 懐かしの映画音楽 100

舞台



G293.7
『イタリアの田舎町』
時田 慎也 / 著
日経 BP 企画

小説

913.6 『道 ジェルソミーナ』
笠井 潔 / 著 集英社

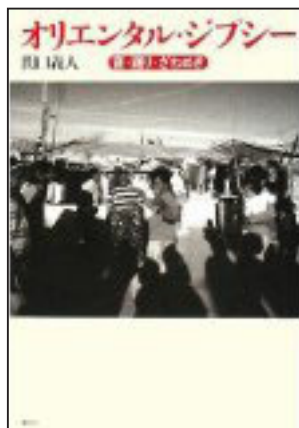
N778.0 『キネマの文学誌』
斎藤 慎爾 / 深夜叢書社



時代背景

382.9 関口 義人 青土社
『オリエンタル・ジプシー』

230.7 『ヨーロッパ現代史』
ウォルター・ラカー / 著 芦書房



封切り当時の日本

N778.2 『昭和シネマ館』
紀田 順一郎 / 著 小学館

778.2 近代映画社
『チラシ大全集 Part 1』

